



Title	芭蕉に於ける旅の意義：俳諧の座との関係について
Author(s)	八亀, 師勝
Citation	語文. 1966, 26, p. 20-26
Version Type	VoR
URL	<a href="https://hdl.handle.net/11094/68571">https://hdl.handle.net/11094/68571</a>
rights	
Note	

*The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

造社「芭蕉講座」第四卷一七五頁)

注3 「去来抄」に芭蕉は宗因を俳諧の中興開山としている。その理由は示されていないが、「白さうし」には「中興難波の梅翁自由をふるひて世上に広む云々」とある。支考になるともっと明確になっている。(「白馬奥儀解」など)

注4 「一体芭蕉の俳句には旅行中のものに優れたものがあり——実は誰に於てもさうでなければならぬのであるが——これが当然の結果でもあったのである。然るに連句の方は俳句の方とは少しく様子が違つてゐる。一体連句は自然に親しむ旅行を必要条件とはせず、それよりも同じ制作伎倆の人の会合の機会如何が重大関係を持つのである。」(志田素琴「芭蕉俳句の展開」二九頁、俳句研究昭11・1)

(二六頁からつづく)

人多し。其人と終にいひ捨てもなし。まして打込の俳諧は名人とてもならず。」(宇陀法師)など。

注2 頼原退蔵「俳諧論戦史」参照。「談林派は、貞門に対抗して、これを打破したとされるが、主目標は句風にあつて、式目にはあまり注目を払わず、貞門派の式目にそのまゝ従つてゐる」(小高敏郎「芭蕉と貞門派」改